

## 日本家禽病史とワクチン～むかし・これから～(1)

中村 賢司

「日本家禽病史とワクチン～むかし・これから～」と題して2020年9月16日、宮崎県養鶏獣医師協議会で発表する機会を得ました。なぜ、このような演題を選んだかという、本会に新規会員が増え、改めて鶏病の歴史をふりかえり新しい鶏病と昔からある疾病を時系列で表せば参考になるのではないかと考えたからです。

本会は、1978年、鶏伝染性喉頭気管炎(ILT)が宮崎県でまん延し、インテグレーションの臨床管理獣医師が、どこで何農場発生し、どう対策したかを協議する場として発足しています。その場所が宮崎家畜保健衛生所だったので職員も同席していたようです。現在の会員は、養鶏の県内インテおよび開業獣医師をはじめ製薬メーカー、薬品卸、ワクチンメーカーの獣医師、宮崎大学、家畜保健衛生所職員などです。高病原性鳥インフルエンザのシーズンは休会、更に今年は新型コロナウイルス感染症で休みが続き、久々の開催となり通常の2倍の40名近くお足を運び頂きました。

鶏病は全部で31疾病あり、古典的感染症12(図のブルーグレイ)と現代的感染症19(図の青)で示しました。しかし、今回は高病原性鳥インフルエンザを2回取り上げましたので全部で32疾病となっております。

今年が昭和95年に当たりますので、昭和以前の古い疾病は、鶏痘、鶏コクシジウム症、ひな白痢、リンパ性白血病の4つになります(図1)。1922年に日本獣医学会が設立されました。1926年に今の高病原性鳥インフルエンザである家禽ペストが奈良県と千葉県、東京府で発生しました。1927年にパストレラ・マルトシダによる家禽コレラが、また1931年に内臓強毒型のニューカッスル病、いわゆるアジア型が関東地方で発生し佐藤株が分離されています。1933年には、本会の発足に深い関係があります鶏伝染性喉頭気管炎が発生しました。また第二次世界大戦が1941年～45年にありました。1941年にバタリー病といわれた浮腫性皮膚炎や関節炎、骨脆弱症やヘタリ病とよばれる化膿性骨髓炎、趾瘤症および趾蹠皮膚炎、内臓型および敗血症の原因となるブドウ球菌症、1945年に鶏パラチフスが発生しました。

出典： 鶏病研究会報第51巻増刊号2015年、273ページの図2  
日本における主要鶏感染症の年代史的分類

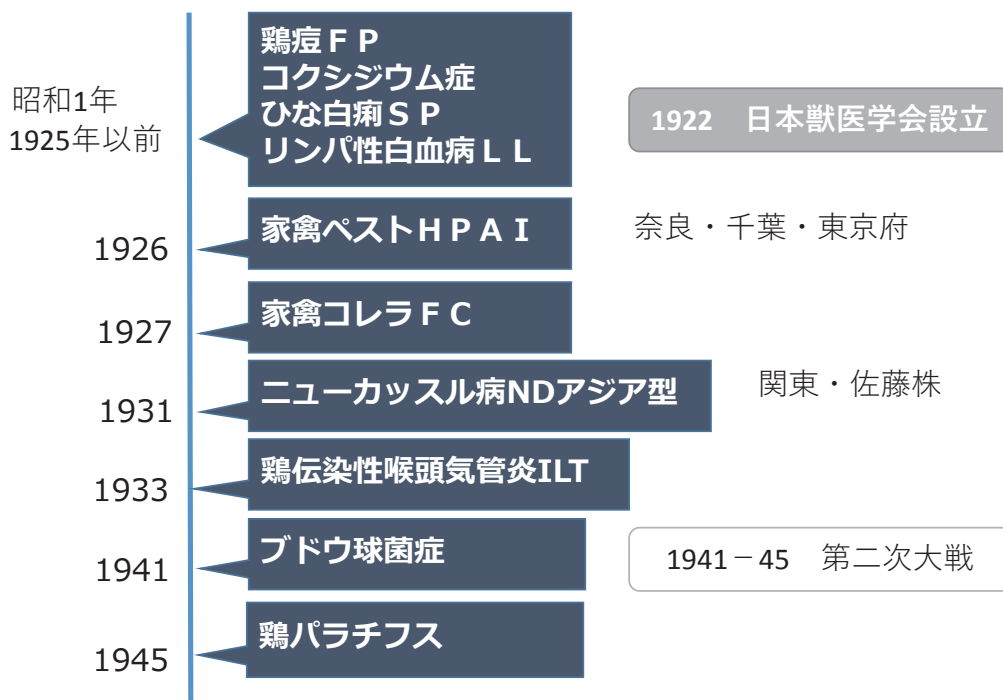


図1 日本家禽病史(1/3)

1950年に鶏伝染性気管支炎、1951年に神経強毒型のニューカッスル病、いわゆるアメリカ型が発生しました(図2)。1953年にロイコチトゾーン症、伝染性コリーザIC-A型、1955年に鳥マイコプラズマ症のマイコプラズマ・ガリセプチカム(MG)、1961年に鶏脳脊髄炎、マレック病、1963年には大腸菌症、1964年に伝染性ファブリキウス嚢病が発生しています。また、1965年9月に鶏病研究会が設立されました。

1968年には、現在のブロイラーの90%以上を占めるチャンキーの原種鶏が英国から日本へ初輸入されました(図3)。1970年に鳥マイコプラズマ症マイコプラズマ・シノビエ(MS)、1971年にトリレオウイルス感染症、鶏貧血ウイルス感染症が発生しました。1972年～93年、岐阜県関市に家畜衛生試験所鶏病支場が設けられ、ここのSPFを用いてMDワクチン接種事故の原因究明に当

たられた、湯浅襄(ゆあさのぼる)博士が1983年CAVを世界で初めて発見され、2013年フランスで開催された世界獣医家禽学会WVPAにおいて、わが国では唯一、名誉殿堂入りされました、と鶏病研究会報創立50年記念号2015に記されています。1972年に伝染性コリーザIC-C型、1976年にアヒルアデノウイルスである産卵低下症候群、1988年には家きんサルモネラ・エンテリティディス感染症、頭部腫脹症候群、J亜型トリ白血ウイルス感染症がまん延しました。1992年に食鳥検査制度が始まり、1996年に鶏アデノウイルス感染症の心膜水腫症候群、2004年には79年ぶりに山口県で発生した高病原性鳥インフルエンザ、2005年に飼養衛生管理基準が定められたのですが、ワクモ寄生症、茨城県で低病原性鳥インフルエンザが発生してしまいました。

(次号に続く)

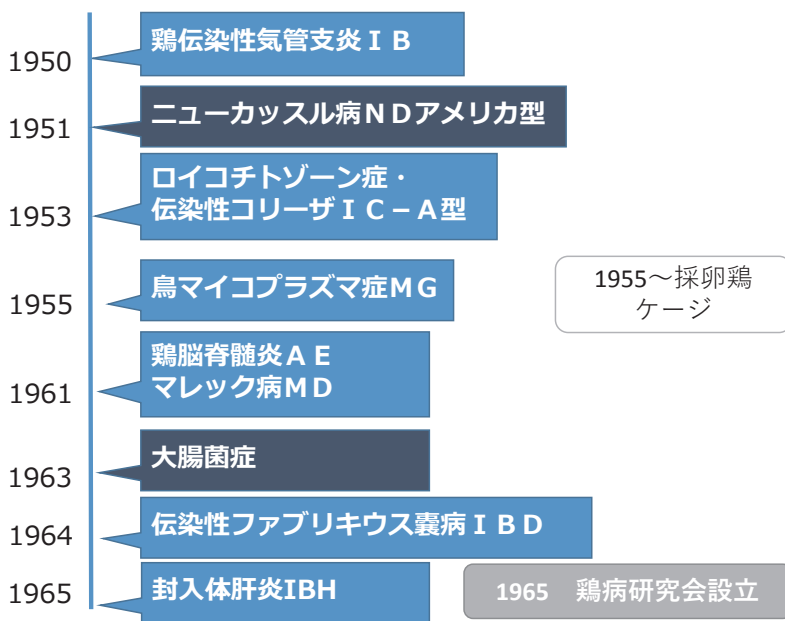


図2 日本家禽病史(2/3)

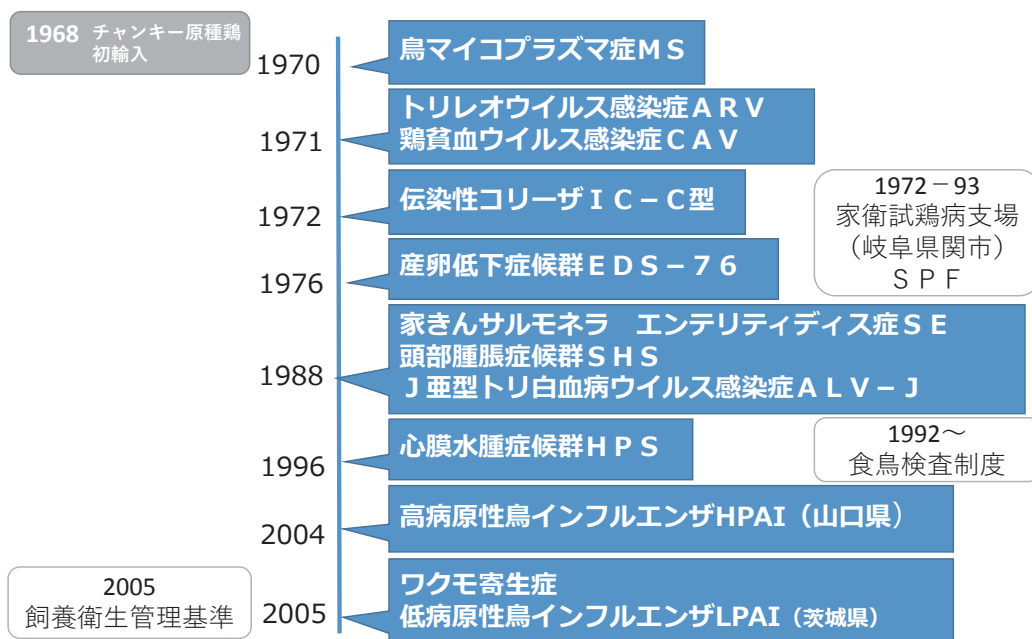


図3 日本家禽病史(3/3)